（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　千葉　拓真

本論文は、一七世紀末以降をおもな対象として、加賀藩前田家と朝廷（天皇・公家）との関係について、江戸幕府や他大名との関わりをも含めた「朝幕藩関係」という視角から解明を試みたものである。序論によれば、その意図と背景は次のとおりである。

江戸幕府と朝廷との関係、近世朝廷の制度や動向についての研究は、ここ三〇年ほどの間に大きく進展したが、大名と朝廷との関係については十分な研究がなされていない。近世国家像をより豊かにするために、各大名が、幕府や他の大名の動向と関わりつつ、朝廷とどのような関係を取り結んだかを、大名家伝来の史料を利用して明らかにすることは、残された重要な課題である。こうして本論文では、豊富な関連史料を残す加賀前田家を対象としてこの課題に迫ることが目指される。

第一部では、加賀藩前田家と公家との交際の特質、縁組の実態、それらを支えたしくみを検討する。第一・二章では、交際・縁組の実態や時期による変化を検討し、とくに一九世紀に財政難で交際関係が整理されるが、幕政や朝廷の動向との関係で、「御家」の存続に利益のある関係が選択・維持されたとする。第三章では、そうした交際の実務を担った京都藩邸詰の役人や、公家への助力金支給の実態を明らかにする。

第二部では朝廷に関連した儀礼をとりあげる。第一章では、一七世紀末に「御三家並」の家格を認められた前田家が、幕府の許可と指導のもと、三家に準じて、家督相続時に天皇・上皇へ御礼・献上を行うようになったことを示す。第二章では、大名家が差し出す文書の書式上の作法（書札礼）をまとめた史料を検討し、享保期には、公家と武家との序列の区別と対応関係、天皇を将軍より上位とする書札礼が形成されていたことを指摘する。第三章では、加賀藩が地下官人から召し抱えた、在京の「有職方」平田内匠家の役割を検討し、朝廷に関する知識・先例の提供、文書作成、折衝などを担ったことを明らかにする。

第三部では、交際や儀礼を支えた京都藩邸の機能を検討する。第一章で京都藩邸研究の現状を整理し、課題を指摘したうえで、第二章で加賀藩京都屋敷の沿革と構造を、第三章で構成員と機能を明らかにし、大名家が京都に拠点を必要とした事情を解明する。

終章では以上の諸論点を、近世中後期における社会の安定と儀礼の重視、都市と全国的な交流の進展などの時代的特質のなかに位置づけて整理する。

以上のように本論文は、加賀藩前田家と朝廷との関係について、藩や藩士の記録を広く掘り起こして解明し、近世中期以降、大名家にとって朝廷との関係が重要なものと認識された実態を提示し、家督相続時の儀礼、京都での情報収集や藩邸の機能、公家への助力などについて重要な新知見をもたらしている。解明したことの位置づけ・意義づけや、幕府の規定性の検討についてなお課題も残されているが、上記のような成果に鑑みて、博士（文学）の学位を授与するのにふさわしいと判断した。